

第23回小野十三郎賞記念対談

生の感觸を失わないために—— 颯木  
あやこ詩集『名づけ得ぬ馬』を巡って

颯木 あやこ (詩部門特別奨励賞)

三井 喬子 (詩部門最終選考委員)

●名づけ得ぬ:

三井 私は颯木さんのことを存じ上げておりませんでした。この『名づけ得ぬ馬』一冊だけの情報しかありませんので、何かトントンカンなことを申し上げたら訂正していただけますか。

颯木 何か必要があれば情報を追加いたします。

三井 何も知らない専業主婦の婆さんですの(笑)、よろしくお引き回しください。

颯木 こちらこそ、私も対談というのは初めての経験なので、わくわくしております。

三井 今回はおめでとうございます。

颯木 お目に留めていただいてありがとうございます。

三井 この本を拝見したとき、『名づけ得ぬ馬』という名前にまずびっくりして引くようなところがあったんですけど、私の年齢的な問題だと思います。私はいま八十歳です。詩

を始めた三十代ぐらいの頃——もつと若い二十歳ぐらいの頃にもやっていたんですが、子育てで十年ほど抜けていますので——、それで三十いくつかで始めた頃はこの『名づけえぬ』というのが流行っていました。

颯木 そうだったんですか。

三井 サミュエル・ベケット(『名づけえぬもの』)だったかな。

颯木 そういう本があるらしいことは聞きました、読んだことはなくて。

三井 私はこれを最初、演劇で見たんですね、昔。「労演」で。お芝居を各地順番で呼んでやっていたんです。そのときに「ゴドーを待

ちながら」(サミュエル・ベケット)なんかをやっていた、そこで知ったんだと思います。

その頃のことはきつと颯木さんはご存知ないかと思いますが……。

颯木 まったく勉強不足で、存じませんでしたが、勝手な私の詩の想像のなかから出てきた言葉でして。一番最後に収められている

「おとずれ」という作品のなかにそのタイトルの言葉が出てくるんですけれど、「詩」が「名づけること」だということがよく言われていますが、そこであえて「名づけ得ぬ」ということを言って、たしかにいろんな反応が聞こえてきたんですけれども、未知の詩の訪れを

「名づけ得ぬ馬」というふうになづけたという、『名づけ得ぬ馬』まるごとが未知の詩の訪れの暗喩といえますか、比喩になっているんです。

●詩が身体に侵入してくる

三井 この場合にはびつたりの言葉だと思わすけれど、私は自分の経験が先に体に染みこんでいるものですから、あれっと思ったんですね。読み出してみたらすごく面白くて、詩が身体に入ってくるという感じがしました。

颯木 身体に。

三井 言葉だけで形成された詩ではなくて、そこに颯木さんの身体とか、感情とか、知識とか、そういうものが全部伝わってくるような身体として迫ってくるような感じを受けました。

颯木 ありがとうございます。私も、魂の叫びというようなことも言われますし、肉体言語というような言い方もしますし、そういう何か、血の通ったものを書きたい、という思いは持ち続けていて。ただ一方で言葉を洗練させていきたい——完成するということはなかなかなくて、一生かかってもそこまでは誰も行かないんですけれど、そういう完成の方向を目指していきたいということと、やっぱ

り有限な自分の心身、肉体をもって、その血の流れ、躍動みたいなのを失いたくない、という気持ちも強いですね。

三井 女性詩にはそういう感覚を持っているものがあると思うんですけど、私には、すべてが知的、論理的な詩よりも馴染みやすかった。

颯木 詩集の編集に入りまして、最初は抒情たつぷりに歌い上げる詩集にしたいというのか、そうなりそうだという予感があったんですけども、編集者と相談しているうちに、エビグラフとか——冒頭にサンテグジュペリの言葉を引きたり、目次の後にちよつとアフオリズム的なものを入れてみたりと、作っているうちに形が少し変わってきました、抒情、肉体の言葉というだけではなく、冷静なところ、抑えるようなところも入る形になったんですね。それをどのように受け止められるか、読者の方に届くのかというところは、出してみるまでわからないと思って作ったんですけど、三井 いわゆる抒情詩というわけでもないし、私は、最近にはない詩集だな、と思った。やっぱり抒情がないと詩としては成り立たないというような偏見を私は持っていて。

颯木 私——現代詩にはいろいろな詩を書かれる方がいて、積極的、果敢に実験的な試

みをされている方もいらっしゃいますし、いろいろな方がいて詩の世界が出来ているんですけども、自分は抒情だな、というのを思っています。大正とか昭和の時代に書くのは、今はまたいろんな刺激が入ってきますので、多少変わる部分もあつての、今回の一冊なんですけれども。

三井 読んでいて、作っていく、組み立てていく、構成するというのか、そういう意思を感じたんです。

颯木 俳句とか短歌——私は短歌もちよつと書くことがあるんですけど、詩は建築に似ている、というイメージがありますね。構造があるというのか。

三井 誰かに勧められて読んだ本、忘れてしまったけど、そういうことを書いてある本を読んだことがあります。とても理解するとまではいかなかったけど、なんとなくわかる。

颯木 私もそんなに詩論をたくさん読んだわけではないんですけど——詩論より詩が先行するとも思いますし、詩を書いているところでも自分の意図ではなくて、詩の言葉に導かれて未知の時空に引き入れられるような体験が、本当に夢中になってしまふ魅力の一つだと思っていますね。

三井 一行がすごく効いていますね。「永遠

はなぜ青い？」だったかな、ああいった言葉がずきんときますね。

颯木 ありがとうございます。

### ●宗教と冒涇

三井 いろいろな教えていただきたいところがあるんです。私、キリスト教の素養がないんです。これを読んだとき、旧約聖書を読まなくちゃと思ったんだけど。

颯木 たしかにキリスト教の影響は受けているんですけど、素朴な信仰者にはなりきれなくて、それで詩を書いているようなところがあるので、真面目な信仰者から見たら冒涇的と思われるんじゃないかっていうぐらいに思います。

三井 「真鍮の椅子」って、これは死刑の電気椅子とかイメージされました？

颯木 書評を書いてくださった方がそのように指摘くださったんですけど、私はそういう発想ではなく、勝手に自分のイマジネーションのなかで膨らませた、椅子ですね。「雷」と合わせて電気椅子のイメージになっていると思うんですけど。

三井 これで、あれ、キリスト教の信者がこういうのを書くのかな、と思いつつ、すごい教えに背くような言葉かもな、と思いました。

颯木 ずいぶん背いていると思います(苦笑)。

冒流的なことを詩のなかでしていて。ただこの詩集の葉を書いてくださった若松英輔さんは、折りというような視点から書いてくださいましたが、読まれる方によっていろいろ印象が違うようで、暴力性とか激しいものを受け取る方もいらしたんですね。

三井 サタンが出てきませんか? 「観覧車とDavidともう一人」のところで。このもう一人は誰でしょう。

颯木 このダビデは旧約聖書とは関係なく付けた名前なんですけど——三人、「私」とデヴィッドと、あともう一人いるという。最後に「私」がデヴィッドと、もう一人のひと、二人に恋をしてしまうといううな、そういう想定で書いたんですけれど。

三井 デヴィッドともう一人と、両者が重なって、両方の面を持っている——あるときは観覧車下がったり上がったりするような、そういうイメージで、あるときはデヴィッドに惹かれるし、時間が経つと他の人に気持ちは移っていくような、そうして神性と悪魔性がせめぎ合うようなところがあるんじゃないかと思って。言葉上ではわからないんですけれど、これ、好きですね。

颯木 ありがとうございます。自分でも気に入っている作品で。

三井 「北の海から生まれた岬の人」というのは。

颯木 それがもう一人の人です。

三井 それをサタンかな、と思ったんです。

颯木 特にどちらかが聖でどちらかが俗という区別をしたわけではないんですけど、両性具有的な存在がデヴィッドなので、いろいろ今話題に上がるジェンダーの問題を背景に感じつつ、出てきた作品のように思っております。

三井 「北の海から生まれた岬の人」というが不思議で、良いなあ、と思うんですけど、それがどういうものを実際に示しているのかは私にはわからなかったです。

颯木 そこは自由なイメージで受け止めていただいて構わないというか、たとえばサタンとか誰かを指し示したわけではないので。作品の世界観のなかの一要素としての人物といえますか、そんな感じで——説明になってないかもしれませんけれども。

三井 わざとデヴィッドとサタンを書き分けたのであれば、私はちよつと読みが駄目だな、と思ったんですけど、そういうわけではないんですね。混合体なわけですね。

颯木 デヴィッドという人物と、もう一人

と、「私」という、二者の関係ではなく三者の関係になっている、というところを書きたかったですね。

三井 それから「ディーブ」も好きでした。「卵の中心がごとくメッキだ」なんて、えっ! —と。これなんかどこかで解説しろと言われたら、できないと思った。これは颯木さん本人がパツと感じたことなんでしょうか。

颯木 そうですね、ほんとど筆の運びの勢いで、感情をこう、吐き出したという勢いで書いた詩行なんですけれど。

三井 これも人の意表をつく面白い言葉だと。颯木 ありがとうございます、面白いところにご注目くださって。

●なるべく一行目から面白く書きたい

三井 私は詩を読むときに自分の体との関係で読むようなところがありますので——要するに直観ですね。理屈が通らないときがあるんですよ。だから選考委員なんてお役目は私にとつては重荷なんですけど——それだけまた勉強しなきゃいけないな、と思うんですが、颯木さんの詩の最後の一行、締めの一行とか、第一連目とか、こういうところにすごく惹かれて。

颯木 私も三十代なかばぐらいから、いわゆる詩を書く方たちの輪のなかで書くようになったんですけど、なんか周りの方が博識で気が引けてしまって、難しい本がなかなか読めなくて、体調のことなどもあって、読書が思うように進まない、ある意味コンプレックスのなかで詩を書いてきたんですね。書くより読むほうが労力だと思うことってございませんか？

三井 私も自分で書くほうが楽です。

颯木 読むの、大変ですよ。読むのが大変だから、なるべく一行目から面白く書きたい——読者の身になってみると、つらつらずつと読んでいかないといけないのは大変なことなので、なるべく一行目から掴んでいきたいという、コンプレックスから出た思いがありますね。

三井 お気持ちがよくわかりますし、すごく効果的に使っているなと思います。

颯木 散文詩も二篇ほど初めて詩集に収めてみたんですけど、字数が多いので、退屈なものとは書かないようにすごく気をつけて書きたいな、というところがありまして。詩を書くのはとにかく一番目としては、自分が楽しいから、夢中になるから書いているんですけど、同時に作品を発表する、世に送り出す

となると、一種それは贈与の行為になるというか、他者とか世界に対して——歴代いろんな、詩人に限らず音楽家も画家も、作品を、すごくいいものが出来たから残したいというところがあると思うんですね。プレゼントだったらなるべく最高のものを差し上げたいという、それと自分が楽しみたいところ、その一致点で作品をつくっていききたいな、というのはありますね。

三井 贈与ということはわかります。私もエッセイのなかでそのことを書いたことがあります。ということとは颯木さんは、この『名づけ得ぬ馬』もそうですけど、すごく勉強なさってるんですね。それで、贈与というのをご本でお読みになったのではないのでしょうか。

颯木 本当に、勉強はしてないんです。謙遜ではなくて。書くなかで思い当たった、そういうようなことなんですけれども。よく詩の教室とか、そういうところに行くと、指導者の方ってたいいてい、書けるようになるにはまず読みなさいとおっしゃいますね。一面そのとおりだと思いますし、基礎にはなると思うんですけど、ただ受験勉強と違って、地道に積み重ねていって書けるというものでもない気がしています。逆に無垢な状態の幼い子供が詩のような言葉を発したりすることもある

し、無垢なことと知識教養を重ねていつて到達できるところ、どっちも大事にできたらな、というのが理想ですね。

### ●腎臓の陰で：

三井 「ユダと逢う」っていうのも好きなんですけど、わからないところがあった。「赤ん坊が四方から匍匐前進してくる」のに逢うというのは、イメージの元がありますか？

颯木 赤ん坊というところ一般的には無垢で可愛らしいんですけど、そこに逆に一種恐ろしいようなイメージを持たせた一行です。自分より弱い、幼いと思っていたものが、すごく力を持って迫ってくるような、そんなイメージです。

三井 もう亡くなって二十年近い友達がクリスチャンだったんですけど、赤ん坊が匍匐前進して向かってくるということを、——彼女の詩集のなかには入っていないんですけど、そういう風景を書いているんです。

颯木 じゃあ実際にそういう情景が。私のこれは想像上のことだったんですけど。

三井 「腎臓の陰でユダと逢う」というのは、こだけズバツこう書いてあるので、ユダは腎臓とか排泄とか、そういうことに関係があるのか、私はわかりませんでした。

颯木 そうですね、心臓だったりますとイメージが魂とかそういうことに近すぎちゃうと思って、腎臓は毒を濾過する器官なので、それで腎臓にしたいんですけど。

三井 ああそういう意味ですか。これは効いているわ。

颯木 ありがとうございます。「ユダと逢う」は、——作品の最後にも書き添えたんですけど——私はときどき朗読ライブをやっているんです。楽器のひととダンスのひとと一緒に。ギターの担当だった方が、「チュニジアの夜」という、ジャズの名曲らしいんですけど、それを弾いているのを聴いてインスピレーションが湧いて、書き下ろした作品なんです。だからその曲のイメージを、言葉を色彩にしてスケッチしたような感じで書いたの、あまり意味とか論理とかは通っていないと思うんです。曲のイメージの色彩というように受け止めていただいたら嬉しいという作品です。

●言葉の勢いを信じていく

三井 だいたい惹かれる詩は、祈りとか、宗教的なものに偏っていくんです。それをギュッと引き締めて書いたらこういうふうになるのかな、と思ったんです。

颯木 どちらかというと、宗教に従順に従う

よりは抗う、葛藤するような作品のほうが力が入るんです。詩人の困ったところなのかもしれないけれど。

三井 こうである、と上から押し付けられると、いや違う、こういうことだってある、と言いつ返しなくなる。

颯木 そうなんですすね。私は子供の頃からわりと大人しいタイプで、学校の先生の言うことをよく聞く優等生タイプだったんですけど、そのうえで高校生の頃にきつかけがあって、求道して、十七歳の頃に洗礼を受けているんです。ただその後に、やっぱりその世界に収まりきれないものを自分のなかにすごく感じて、詩で爆発するようになったという感じなんです。ただ影響は受けてると思えます。この詩集にも結構、モチーフとしてユダとか出てきますし、一つ言葉へのスタンスとのか、キリスト教は言葉の宗教とも言われて、言葉は信じる対象なんです。詩の世界に何もわからず飛び込んだときに、たいいての詩人の方が、言葉はまず疑うべきだとおっしゃる方が多くて、私が初めての詩集を出したときに、ご感想で「言葉を信じすぎている」とご指摘してくださった方がいて、心底びっくりしてしまっただけです。

私としては言葉を疑うという発想がなかっ

た、言葉はいつも信じる対象だったというところがあって、別に詩を書いていて何か正しい答えが一つ決まっているわけでもありませんし、ただ自由に詩の言葉の海を遊んでいるだけなんですけど、ただ——さきほど申し上げた、読書が思うように進まないというコンプレックスと合わせて、詩の次元に飛び込んでいくというか、信頼して言葉に導かれていくような、まあ疑っていてもいいんですけど、疑いながらも言葉の勢いを信じていく、そういうスタンスはキリスト教から引き継いでいると、振り返ると思います。

三井 私もそういう態度でした。先に言った一緒に長くやってきた友達の影響もあるし、今となつては、この詩集、『名づけ得ぬ馬』を彼女に読ませたかったという気がすごくするんですよ。「私は牧師さんを信じてない」とかなんとか言いながら、ちゃんと教会に通っていたんです。

颯木 たしかにそこはいわゆるアンビバレントな状態になるんです。やっぱりキリスト教って十字架の受難の物語とか、非常にドラマチックで、心を掴むストーリーを持った宗教なので、そこはなかなか、一度掴まれると離れがたいというところはあるんですね。とはいえ宗教って人の手になるところが多分

にあるので、民を治めるためという都合で教理が加えられたり削られたりつていうプロセスもあったらだろうと思いますし、そうするとやっぱり取りこぼされている人間のいろんな面がたくさんあって、そこで苦しくなってしまうと思うんです。

三井 私自身は八百万の神、そのへんの草木にも神様が宿っているというような、いい加減な人間ですから（笑）。

颯木 けしいいい加減とは思わないです。私とはもとと家がクリスチャンホームだったというわけではないので、家には神棚とか仏壇とかあったんですね。途中から求道して、その後逡巡して、自分はやっぱり詩のほうで魂のびのびすると思って今に至っているのが、草木に宿るという感覚もわかります。

### ●混沌と豊饒

三井 この「太陽葬」なんかはバタイユかなと思いましたけれど。

颯木 これもなんか、妄想ですよ。太陽のなかに犬と盗賊の死体がいっぱい入っている。三井 すごいですよ、こんなのを最初の一行に持ってくる。で、辛い真夏がやってくる。悪臭がもれて……。私、こういうところに弱いんですよ。

颯木 それは嬉しいんです。この詩集の最初の一行に百合が出てきて、百合って清らかなイメージでもあるんですけど、何かこう、生とか世界ってものともとは混沌というか、非常に豊饒でゴチャゴチャしたところだと思っんです。だから清らかなものに一本化できるものでもないし、そこにいろんな豊かさを、この詩集のなかで展開したいと思って。ときどきギョツとするようなものも出てくるんですけど、そこを喜んでいただけると大変嬉しく思います。

三井 どうも清らかなものが出てくると、壊してみたい気がするんです。

颯木 私もその気持ちです。「太陽葬」の次の「天の魚」で、最後に「祈りと歌は絶望のように巡るだろう」と書いたんですけど、これもそういった反抗心というか私独自の感じ方から出ている。祈りというと希望とか平安に繋がる、それが一般的なイメージなんですけれど、私は自分の実感として、八方塞がりだったり願いが叶わないときに祈るって、安らかな気持ちにならないですよ。非常に悶えるような、祈りって希望というより絶望に近いんじゃないか、と思って書いたの、これは結構思い切って書いたんですけど、教会では怒られるでしょうね（笑）。

三井（笑）これいいなあ、と。その次の「ボジションX」なんかでは、「影法師を五つも率いている」とありますが、この五つという特定の数は。

颯木 自分のなかで多い、たくさん怒りの分裂があるというのは、まあ五ぐらいが自分の感覚だったんでしょうねえ。

三井 私の知識のなさがこういうところで出ているんだろうかと思った（笑）。

颯木 いやいやいや、出典も何もないんです。三井 私はあまり出典があると困る。（笑）

颯木 ほとんど私の自由なイメージと妄想で出来ている詩集ですので、楽しんでいただければ――。

三井 良かったです。順番に見てきましたけど、「フェルマータ」の後に「おとずれ」、ですね。希望とかいうよりは、辛い、苦しさが出てきましたよね。「わたし全体を駆け抜けて」、これがやっぱりいいですね。

颯木 ありがとうございます。これは読んでくださった方がいろいろに解釈してくださったんですけども、それはきつと読みによって開かれていて、きつと詩にそういう意味も生まれていくんでしょうけれど、私が最初に書いたときは、「名づけ得ぬ馬」がやってきて、最後に「名づけ衝動」が起った瞬間を書い

たんですね。未知の何かが来たときに、わあっと、今、言葉を発する、その瞬間を切り取った詩行なんです。

三井 私はもう読みながら、すごく自分の好みに引きつけて読んでいるな、と思って申し訳ないんだけど。

颯木 それは逆に嬉しいです。

### ●身体性

三井 読んでいてとても楽しい詩集でした。やっぱり詩集、詩にはこうやって、自分が打たれて、それで心地よかつたりするような面も必要ですね。発散できるんですよ。読者の、苦しみを持っている人の、こうちよつと傷つけるとわあっと出ちゃうような、そういう力があると思うんですね。それは身体性という言葉で言えるんじゃないかという気がするんですね。

颯木 そうですね、身体性というと、痛みとか傷とかいうものが私の詩集によく出てくるんですね。感覚ですよ、体で受け止める傷の痛みとか、そういう。創作ってキズを作るって書きますよね。生の感触みたいなものを失わないために、痛みも喜びも両方引き受けていくというような、それこそが生きていくことの豊かさじゃないかな、と、今

回の詩集を作っていくプロセスで、詩に教えてもらったような気がします。

三井 すごく同感します。

颯木 前の詩集まではわりと、——さっきキリスト教的な祈り、それから悪魔的なものというお話も出たんですね、わりと両極端な価値のなかで引き裂かれて葛藤して書くということが多かった。今回の詩集を作っているなかで、両方とも受け止めたらいんじゃないか、というようにところに、階段で言ったら踊り場みたいなところに、出られたような気がしています。創作は、自分も傷を負いながら書くもの——身を削って書くなんてよくいいいますけれど、そんなに大げさなことじゃなくて、何か命を作品に移し替えていくような、そういう営みのようにも思います。結構まわりを犠牲に——家族に迷惑をかけつつ書いてきたという疚しさもあるんですね——何も傷つせずに書けたら一番いいのかもしれないんですけど、犠牲を伴わない創作というのはないんじゃないかと。業のようなもの——そこはキリスト教的に罪というよりも、業という言葉が私はピッタリくるんですね、業——詩に限らず生きていくことはみんなそうなのかもしれない。

三井 他者の犠牲なくして生きてはいけない

んですね。

颯木 食べること一つとつても。

### ●夜空

三井 もう一つ思ったのは、夜空に対して偏愛があると思いましたね。星空に対して。

颯木 「砂金」とかですかね。

三井 そうですね。大天座ですかね、「銀」、これは。

颯木 天駆ける大犬。

三井 それはイメージとして大犬が実際に駆けていってもいいわけですね。

颯木 星座と読むこともできますよね。

三井 こういうことを言うと、私というか、私たちはちよつと古風であると言われることがあると思いますが、この「最果ての天秤に置き去りにした」、これは天秤座ではないんですね。

颯木 これは星座という想定ではなかったんですね、天秤座ってありますね。

三井 何かこういうものを見て、すごく夜空を見ながら詩を書く方なのか、と。

颯木 書いてるとき、——まあ窓があるので木が見えて、青空がちよつと見えますけど、目が悪いので星ってなかなか見えないうすね（笑）。想像上の時空の星空ですね。この前、

三日月の横にきれいに金星が出ていたのは見えましたけど。

三井 見ました。うちは南のほうにしか窓が開いていないので、南しか見えないんですけど。颯木 南に見えた気がします。きれいでしょね。

三井 本当に晴れた、きれいな空の後に見たから、感激してたんです。

颯木 星だったり花だったりっていうのは、すぐく進んでる詩人の方々には見捨てられていくようなモチーフのような気もしますけどね。

三井 そうですね。あまりに象徴的すぎるとか。

颯木 私はわりとそういう、——下手するとありきたりなものに陥ってしまうので気をつけないといけないのはたしかなんですけど、古来詩のなかで愛されてきたモチーフをやっぱり愛しちゃうんですよ。

三井 そうですよ。

颯木 それを自分なりにもう一回書いてみたい、という気持ちがあったのと、あまり知識を詰め込んでいなかったの怖いもの知らずだったゆえに、そういう古いと言われるようなモチーフも怖がらずに書いてこられたというところはありますね。

三井 それがすごい魅力になってると思うんですね。「名づけ得ぬ」が古いイメージがあ

るといふのと、だけど今のもっと若い人たちのものに対しても、えっ、と思う気持ちはないわけでしょう。私たちの世代までなんですけど、思うのは。そういうことを思うと、言葉を新しいとか古いとか言うんじゃないかと思う。り使ってやらなきゃ可哀想じゃないかと思う。颯木 そうですね、新しい言葉というのがあるのかよくわからないですけど……新しく出た電化製品とか、品種改良した花とかですかね。やつぱり昔からあるものは今もあるわけですし、時代——一人残らず皆が時代の申し子で、時代の影響は生きている限り受けるわけですね。ただ私がよく思うのは、自他とも認めるところで、ちよつと時代を間違えて生まれてきたかというところがあつて（笑）、もうちよつと昔だったら良かったのかなと思いますけどね。新しいものがわりと苦手なんです。ただ知らず知らずのうちに影響を受けている部分については、自然と作品のなかに、自分でも気づかずに反映されるでしょうし、それで充分なんじゃないかと思つたりしています。

三井 あまり新しくて、誰にもわかってもらえないっていうのもちよつと問題ですね。とつかかりぐらいいは教えてよ、と。

颯木 私の詩もわかりにくいとおっしゃる方

がいらっしゃるんですけど、私も他の方の詩がわからないことが多いですし、どこか波長が合ったところで読者と詩人が会おうと幸せだと思えますね。

三井 颯木さんと私ですね。

颯木 ありがとうございます。

●こぼれるもの、古さとエネルギー

三井 なかなかわからないものが多いですね。これが若い女の人の感覚がよく現れているとか、よくそういう評が詩集評なんか読んできると出てきますけど、私若くないのでわからないと思つて（笑）。

颯木 そうですね、誰がそれをわかるのかという問題はありますよ。本人以外に。この詩集を作るなかで、もちろん担当の編集者の方のアドバイスもたくさん、有意義なものをいただいで出来上がったんですけど、何年かやっている朗読ライブの仲間からの刺激というのも多くてですね。さっきの「ユダと逢う」はギター担当のメンバーの演奏を聴いてインスピレーションが湧いて書いたもので、ピアノ担当のメンバーが詩に合わせて作曲をしてくださったりもするんですけど、彼から何年か前に言われた言葉で手元にメモがあるんですが、「詩を書くときに削られたり

失われたものたちの再来、再会、声が呼び寄せたものとの出会いです。それを音に託しているつもりなんです。」というふうなメールでくさって。とても心に残っていたんですけど、言われた当時はそれがどういうことがあまり理解できなかったんですね。何年か経って、じわじわとそのメッセージが実感として感じられるようになりました。

詩というのは、この世とかこの社会に横行している言葉によって、失われたり切り捨てられたりしてしまったものを、もう一度言葉によって取り戻そうっていう、無謀な試みなんだと思います。そして詩を書いても書いてもその都度さらに取りこぼすものがある。

三井 無謀でもやらなきゃならない、やりたい、そういう言葉ですね。

颯木 それはもちろん私の発見というよりも、多くの方がすでにおっしゃっていることなのかもしれないですけども、だからこそ詩は優しくて、でも同時に激しいものでもなくちゃいけない、という気がしていて。何かこう、マイノリティみたいなことともリンクする気がします。

三井 そうですね、私もよく、あちらでヨシヨシしておいて、それをそんなカラスを殺しちゃったりとかやります。両方含まれてない

と、ちょっと人間が書いたものじゃなくなっちゃう。

颯木 優しさと激しさ、もつと言ったら残酷な部分も人間って持っていますし、清廉潔白で詩を書けるものでもないですし、やっぱり自分の業だったり、そういったところにもがきながら紡いでいくもの、という気がしますね。それから、よく私が疑問に思ってた、三井さんにお伺いしてみたんですけど、詩人は孤独だってよく言いますけど、そう思いますか？

三井 自分の考え方、どういうふうにしていくかっていうのは孤独な自分なんでしょうけど、大勢のなかで生きていかなないと成り立たないですよ。両天秤のなかでやっているようなことができなくなる。私はそれを、意識しているというよりは、孫を可愛がるついでにカラスを殺すような、両方をやらないと安定を保てない。天秤が傾いちゃうんです。

颯木 生き物を殺すということだと、きっと文明化される前は、飼っている家畜を自分の手で殺して食べたりしていたわけですよ。そういったプロセスが全部、今は畜産業者がやって、スーパーでバックされて売られている。そうすると殺すときに人間が発していた一種のエネルギーマーっていうのは、行き場を失

っていると思うんですよ。それって結構怖いことだと思うんですけど。

三井 私の子供の頃は、田舎でしたから、鶏の首を締めてっていうことは祖母がやっていましたからね。羽をむしって。それを美味しい美味いって言って食べていた。

颯木 そのプロセスは全部隠されてしまっているけれど、結局は同じことをしているわけですよ。今のほうがもつと残酷かもしれないですね。狭い鳥小屋にたくさん閉じ込められて。

三井 その頃は九州からでしたけど、夜行列車で冷凍して、首のない足のない鶏を都会へ送っているんだって。今通っている夜行列車には死体がいっぱい乗ってるんだ、っていうイメージを持ちましたね。

颯木 何か詩になりそうです。

三井 颯木さんの、ある種の古さですか、それにはそういうふうにも、もろに事柄、事態を引き受けようとしている態度があるからかもしれないですね。百合のために棺を作るみたいになっっていくっていうのは。

颯木 どういうところで古さに繋がるんですか。

三井 私たちの古い経験ですね。それとまれいにバックされたものとの、その間にあるも

のを颯木さんは全部持つてらっしゃるんじゃないか。

颯木 実生活ではそれは、バックされた肉を買っているわけですけど（笑）、そこで本来放出されたエネルギーを持って余して詩を書いているようなところはありますね。

三井 そういうものを含めて詩を書きたいと思いますし、この詩集には入っているな、という気がします。

### ●幻の一篇

颯木 あとは一つエピソードとして、ゲラの段階で頁数の関係で一篇落とさなきゃいけないってんだですね。幻の一篇がありまして、それは私にとっては大袈裟じゃなく自分の命を救ってくれた一篇だったんですね。そのなかの詩行を繋いでいくことで危機を乗り越切った時期がありまして。それを収めることができなかったのは残念だったんですね。ただ詩集を編むというのはそういうことなのか、と。命を救ってくれた一篇さえ落とすことも辞さずに、進まなきゃいけないときは進まなきゃいけないのか。その一篇も別な機会に発表する機会があるかわからなくて、もしかしら土に還っちゃうかもしれないけれど、私を支えてくれた一篇に違いないし、

その一篇のことが忘れられない。

三井 次の詩集でその一篇を膨らませて、また一冊の詩集にすることもできますしね。どうしてもね、自分がやってきたことって、何もかも入れたいわけですよ。

颯木 そうですねえ、何を入れて何を落とすか、書くときは思いつくまにいろんなものを書いていくんですけど、纏めるときは——今回は『名づけ得ぬ馬』ということで、馬

の出てくる詩をときどき置いたんですけど、そういう工夫とかも必要かと思うし。どうなんでしょう、書いたものを全部入れて編む方もいらっしゃると思うんですね。

三井 落とすと可哀想。

颯木 そうですね。何かこう、子供みたいな感じですよ。

三井 でもやっぱり思いきらなきゃならないときはあると。

颯木 そうですね。

三井 詩集一冊出しておつかれだと思えますけれど、入れられなかった詩のことを思うと、やっぱり生かしてやりたい、って思われませんか？

颯木 そうですね、ただ今回の詩集のテーマに沿った詩だったので、次回編むときはやっぱりお蔵入りかもしれませんね。

三井 でも持ったときにスツと馴染む厚さで

もあるし、——あまり大きすぎるとしんどいし。小さい詩集がいいとは言うけれど、やっぱりちよつともう少ししっかりした厚さ、本らしい本がほしい、そういうときもありますね。丁度適度なところだったと思います。

颯木 いろんな制約もありましたし、原稿の段階ではわりとイメージが混み合っている詩が多いように自分で感じて、重すぎるんじゃないかと思って、編集者の方と相談して、余白をもうちよつと取ろうかとか。全部で二十八篇かな、今までの詩集は毎回そのぐらいです。もつと入れたいところでもあったんですけど、自分で読み返しても、あまり多くても心に収まりきらないですしね。

三井 そういうときに、編集者の目っていうのはすごく、いいな、というか、立派だな、と思っただけです。

颯木 そうですね、本当に。

三井 後になってみると、私が無理やり入れたものは無駄だったな、と思っただことが何度あります。大事な詩だと思ったものも、後から見ると流れに入っていないのかもしれないよ。

颯木 そうかもしれません。その一篇を落として、それからまた順番を変えたんです。一篇抜けたことで整わなくなっちゃったので。

三篇目に「砂金」が来てるんですけど、これが最初の段階ではもうちょっと後ろだったんです。でも順番を変えたことで結果的に「砂金」をより生かす構成になったんです。わりと繊細なタイプの作品なので、あまり他の作品のイメージの後だと押し潰されちゃうんですよ。

三井 そういうことはありますね。「永遠はなぜ青い？」は素朴で魅了されてしまいました。颯木 ありますがございます。これは私としては結構迷ったんですね、最後に入れるかもっとあつさり終わらせるか。

三井 この言葉が力を持ってるんだと思いますけど。

颯木 じゃあ良かったです。編集者の方も、これがあったほうがいいという意見でした。

三井 最初と最後がピンと張り詰めてらっしゃる。

颯木 一行目と最終行ですか？

三井 一連目と最終連といってもいいけど、最初と最後が、ズバツ。たとえば「観覧車とDavid」ともう一人」だったら、この後に何か付けようとは思われないでしょう。

颯木 何か小説の場合だったら続編を書くこともありますが、詩はやっぱり完結するものなんですか。

三井 連作でなさってることも皆さんありますね。少しずつそのなかで、繋がるところと繋がらないところがあつて……。

颯木 私はわりと飽きっぽいので、一つ書いたら次は別のを書きたくなっちゃいますね。とは言っても、繋がってきているものもあるもので、急に全然違うものが書けるわけでもないんですけど。飽きっぽくて良い面もあるかな、と。より面白いものを書かないと自分が退屈しちゃうぞ、というのはモチベーションになるかもしれない。

三井 長いこと経ってから見ると、案外一つのことしか書いていなかったりして。

颯木 それはあるかもしれませんが。何かこう、詩って論文とか小説と違って、たとえばこのテーマについて書くかと思って書き始めるものじゃないとか、何か刺激があったときに最初の一行が浮かんで、書いていくうちに出来ていく、不意に何かイメージが湧いたり、今まで気づかなかった自分の深いところの何かに行き当たったりしながら、立ち現れてくるようなものですよ。

三井 それは颯木さんと私のやる方向であつて、そうじゃなく最初から結末がわかつていて中で組み立てていくことができる方もあるんじゃないか。

いろんな書き方がある。

#### ●着地 a

颯木 私は書いてみないと、最終連がどうなるかいつもわからないですね。これは勝手な持論なんですけど、目的地がわかっているんだつたら論理で書けばいいと思うんですね。そうじゃないものを拾い集めるのが私にとっては詩なので。でも最初に詩を書き始めた頃は、自分の感情を表現したいという意図が先立っていたと思うんですね。何を書くのも自由なので、思いを綴るということがスタートだと思うんですけど、だんだん、言いたいことを言うのが詩ではない、というか、でも究極的に言いたいことを言うのが詩だとか——上手く言えないんですけど、魂レベルで言いたいことを言うのが詩なんじゃないか。

表層の部分の言いたいことというのは、社会のなかで影響を受けている部分、世の都合とか、そういうなかでこういう意見を言うべきだろうとか、そういうところの次元の言いたいことじゃなくて、本当に自分が言いたいことっていうのは自分でも気づいていないことが多いです。

三井 それを書いていって出てくるということですね。

颯木 そうですね、詩を書いていると、そういうのがフツと出てくる。

三井 いろいろ考えるんですけど、結局私をやっていることは単に言葉を転がしているだけかな、と思うんですけどね。

颯木 言葉が転がるんだったらすごく良いなと思いますけどね。

三井 近年転がさないと転がらないようになってきて(笑)。もう詩を書くのもやめなさいいかんかな、と思ったりもします。

颯木 一つ詩集が出来たり、詩が一つ書けたら、それこそ初心者の頃は講座とかに行ったりしてアドバイスを頂いて、最終連の着地が課題だね、なんて言われたりして、それを一旦克服というか、上手く書けるようになったところで、あまり纏まってしまっても言葉が生きないということもありますし。

三井 そうですね、開いてないと次に繋がらないですね。いかにして開いた状態で終わらせるか、というの。

颯木 それは結構難しいですね。

三井 閉じてしまっってはちよっと。だから「永遠はなぜ青い？」っていう、ああいう開き方がすごく私にとっては魅力的なんです。

颯木 疑問形で終わっているところですね。一枚の紙に詩を書くこと自体、ある意味世界

を制約しているわけですよ。それはまたあえて何か取りこぼしてしまうことでもあるし、ただそこで何を言葉として残すか。最初のお話に戻りますけれども、たとえばキリスト教という従うべき枠があるとすると、それに抗う気持ちが起こったり、制約が逆にエネルギーを噴き出させる基礎になることはあるのだと思います。こういう長さの詩を書くかも、短歌や俳句と違って自由ですけど、———すこく長いものを書かれる方もいらつしやるみたいですけど、一息で終わる、その詩のサイズというの、読んだり書いたりする者の心の器と共鳴するのかな、なんて思いますね。

#### ●着地 b

三井 それが同人誌という枠のなかで書くこと、だいたい何行っていう……。

颯木 投稿規定が決まっているわけですね。

三井 あれが私はちよっと邪魔くさくて。

颯木 たしかに。

三井 それで長いこと個人誌をやっていたんですけどね。だんだん皆さんの、同人の、詩の形や書く内容が決まってきたので。

颯木 それは制約があまり良くない方向に働いている例なのかもしれないですね。参加者の公平性の面からいくと規定って便宜上必要

だと思っんですけど、どうしてもこう、一行入りきらない作品は諦めなきゃならないとか、ありますよね。

三井 朗読なんかでも、三分、四分というようにキチンとなつてしまうと、ちよっと苦しいですよ。そういうときは音楽のほうを優先されるんですか？

颯木 詩のライブなので、基本は詩が優先ですね。曲のほうを調整していただく感じですが、ただ詩を読み終わって最終行、その後にまだ音楽が続いていてもいいわけですよ。あとは先に曲が終わって、その後に言葉が続いてもいい。

三井 私は朗読するときに音楽とやるというのは、その点が辛くて。

颯木 わりとアバウトにやっちゃってしまってるんですけど。ただ、音楽が先に終わるにしろ、余韻のところで音楽が残るにしろ、聴いていてスツと馴染めればいいかな、というぐらいのところでやっています。

三井 一度拝聴したいものです。

颯木 ありがとうございます。今、コロナ禍でなかなか開催できなくて、『名づけ得ぬ馬』の記念のライブもやりたいとは思って心に温めております。

二〇二一年一月、オンラインにて実施。